

霧の中で

野口 武久
(詩人)

霧は音もなくやって来た

足のあいだや腕にも

ゆつくりとまとわりつく

地上にあるものを消し

白くつめたい無の世界に

わたしを誘う

霧はかたまりになって旅する

生きものだったのだ

つかの間 消え去った風景を

思い返そうとするのだが

よみがえってこない

アンダンテの楽章を

聞くように

遠い日

光がこぼれていた

海のうねりのように

わたしの思い出は

霧色の感傷に溶けてゆく

迷いこんだ黒い蝶が

見えかくれする

とまる場所がないから

同じところを

くりかえし飛んでいるのだ

沈黙の霧ははてしなくひろがり

焦燥の蝶は

激しく羽をふるわす

第77号

酒林

SAKABAYASHI

随筆特集



絵と文
ほろ酔い詩歌紀行

柔道とアントン・ヘーシンク

白川静と立命短歌会
—— やしなひの乳

絵と文
社会常識

クイズ番組花盛り
新入りの野良犬

詩
霧の中で

「ぞうきんがけ」とポエジー
スペイン風邪の木霊

赤羽のつつみ

野口武久…1	池井優…4	高橋和島…6	堂昌一…8	安森敏隆…9	日高昭二…11	伊勢田邦貴…13	内野潤子…14	宮地智子…16	杉本忠夫…18
--------	-------	--------	-------	--------	---------	----------	---------	---------	---------



小説・江戸神仏歳時記(18)——江戸・鳥越神社 郡

表紙・グラビア……讃岐装飾瓦

絵と文 絵 ダリア 中西美子……20

同人雑誌と文学の魔力 志村有弘……21

「強い個性」 志村栄守……23

拳さんの字 桐原良光……25

絵と文 絵 旅へ 佐川毅彦……27

一九四五年秋、民主主義の始まり 片岡義男……29

俳句を肴に酒を飲む 新田啓造……31

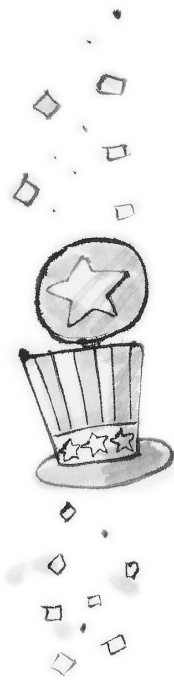
絵と文 絵 ブルゲンランドの秋 さかもとふさ……33

開瞳葉雑誌想 永岡慶之助……34

十一年目のピケ 山本千明……36

順史……38

クイズ番組花盛り



池井 優

(慶應義塾大学名誉教授)

クイズ番組が花盛りだ。さして制作費がかからず、ある程度の視聴率が見込めるクイズ番組はテレビ局とスポンサーにとって魅力あるものらしい。

クイズが放送に登場したのは、戦後間もない一九四六年十二月のことであった。アメリカやフランスで放送されていた「インフォメーション・プリーズ」をモデルに「話の泉」がNHKラジオでスタートしたのである。

「六十九連勝の横綱双葉山の土をつけたのは安芸の海ですが、では連勝の前には双葉山を破った力士は誰だったでしょうか」といった知っているようで知ら

ない難問に答える番組は好評であった。

第一回と第二回の司会は宮本武蔵などの朗読で放送にもなじみの深かった徳川夢声が担当し、第三回から名アナウンサーの誉れの高かった和田信賢に代わった。解答者は新聞記者の渡辺紳一郎、作詞家の藤浦洸、映画監督の山本嘉次郎、詩人のサトウハチローなど博識で多彩な顔ぶれだった。「話の泉」の翌年に始まったのが「二十の扉」であった。これも米英で人気の「トゥエンティ・クエスチョンズ」の日本版で、「これは動物です」のヒントからスタートし五人の解答者が二十の質問以内に

当ててみせるというものだった。「二十の扉」の最初の質問は「竜宮城の乙姫さま」だった。藤倉アナウンサーのやわらかな司会、童話作家の関屋五十二、女優の竹久千恵子、医師で画家の宮田重雄など明朗で家庭に親しまれるキャラクター五人をメンバーに選んでのこの番組は大好評で、出題の投書が一日一万通を超えることもあったほどの人気を博した。

テレビ放送が開始されると、クイズ番組も見えて楽しめるものへと変化する。その代表が「私の秘密」だった。高橋圭三アナウンサーの「事実とは小説より

も奇なりと申しまして」という有名なせりふではじまるこの番組は、貴重な思い出や珍しい体験をもっている一般のひとが登場、四人の解答者が秘密の持ち主に質問しながら当てていく。視聴者と会場の観客には「陰の声」が事前に知らせた。ビール飲みコンクールで優勝した女性、双子の芸者など意外な秘密が受けて、この企画にラジオ・テレビをつうじてはじめての菊池寛賞が送られたほどであった。民放テレビから生まれたクイズの傑作は、日本テレビの「アメリカ大陸横断ウルトラクイズ」であった。予選会場の後楽園球場にはじまり最終目的地ニューヨークをめざすこの番組は、ジャンケンで空港のロビーから消えるもの、さらに答えを間違えてグアム島の泥のプールに突っ込む罰ゲームなど意外性もあり、アメリカがまだ憧れだった時代的背景もあって視聴率三十%を超える大人気となった。十六年間の予選からのクイズ参加者総数は二万三千四百三十人、ゴールの自由の女神までたどりついた

のは三十一人であった。当時のクイズ番組は、解答者間の勝負をいかに盛り上げるかにウエートがおかれた。「クイズ・タイムショック」(テレビ朝日)は、答えを間違えた解答者が悲鳴をあげて高いところから回転しながら下りてくる罰ゲームを盛り込み、「クイズダービー」(TBS)は、正解率の高いマンガ家はらいたら、三択の天才竹下景子、正解率は低いが人気の愉快教授篠沢秀夫などを起用し、競馬の手法で正解者当てをからませるといった工夫がこらされた。スタジオでのショーアップに力をいれたこうしたいきかたの殻を破ったのが、海外の情報を映像で入手して取り入れる「なるほど!ザ・ワールド」(フジテレビ)だった。こどもをかわいがるとき、日本では頭をなでる、しかしタイでは宗教上のタブーとなる、こうした常識のギャップや盲点をついた発想は夜九時からの一時間番組というクイズの時間帯にはなかった冒険も成功し、「世界まるごとHOWマッチ」「クイズ世界はSHOW・b・y・ショー

バイ」など類似の企画がつぎつぎ生まれるきっかけとなった。

そして現在のクイズはかつてのように、一般のひとびとが知識と運を競うものから、タレント中心に変わり、きわめて安易なやりかたが目につく。京大出の芸能人对現役東大女子学生、あるいは「インテリチーム」対「芸人チーム」など「学歴信仰助長企画」であったり、「自民党四役を答えよ」に、大表取締役、せいちよう会長、大臣と答えて平然としていたり、「ニチペンレンは何の略」に「日本便器連合会」と珍答を披露する芸能人の無知に唖然とする「おバカタレント嘲笑番組」であったりする。しかもどの番組をみても同じような企画で同じような顔ぶれだ。かつてのように、企画の段階からスタッフが工夫をこらし、十分な準備をおこなってオンエアした時代とは雲泥の差である。飽きられるのは時間の問題であらう。

新入りの野良犬



高橋和島

(作家・郷土史家)

家の近くの公園でその犬を初めて見かけたのは、十月初旬の雨の日である。ひとくちで言えば、賢そうな端正な容姿の犬だった。ふさふさとしたウェーブのかかった黒と白の豊かな毛、飾り毛のある長い尾、顔、胴、脚のバランスがとれたスマートな体型、好ましい印象を与える犬であった。

朝の散歩でよく顔を合わせる同じ町

内のA老人が後日教えてくれたところによると、ボーダーコリーという種類で、非常に賢く、飼い主によく従うので扱いやすい犬だとのことだった。

小雨降る公園の中にいたその日のボーダーコリーは、遊歩道脇の東屋の周りをうろついていたが、近づくわたしの足音に気づき、こちらにじっと目を凝らした。

〈見慣れぬ犬だな。飼い主らしい姿が見えないけれど、野良犬にしては毛並みがきれいだし、やつれてもいない。野良犬だとすれば、まだ成り立ての新入りさんというところかな〉

犬は穏やかな目をしていて。人間を警戒する目でもなく、ましてや憎悪する目でもなく、見ようによつては哀しげな色を漂わせた目をしていて。

彼までの距離は二十^{メートル}ほど。わたしはひとまず用心して立ち止まった。

傘をさした当方に目を凝らした犬はやがて視線をそらしてしまった。それがなぜかわたしにはひどく落胆した仕種に映った。

——ボクの捜している人が来たのかと思つたけど、まるで違う人じゃないか。ガツカリだな。

こんな声が聞こえたような気がしたのである。

ボーダーコリーはやはり野良犬の新入りだったらしく、次の日もその次の日も公園に姿を見せた。

目立つ容姿の犬だけに散歩仲間の間で話題にのぼるようになった。

「転動して行った人が無責任に置き去りにしていったんやろう」

「犬の面倒を見切れなくなつてゐる高齢者家庭が増えているから、そのあたりが捨てたのかも」

「朝晩犬の散歩をさせていたKさんの姿を見掛けなくなったと思つたら、亡くなつたそうやな。あの犬は別居し

ている息子さん夫婦が引き取つたそうやけど、引き取り手のない犬は野良犬になるしかないわのう」

新入りの野良犬を巡つていろいろの話が出たものの、どれも憶測の域を出なかつた。

四 五日経つとボーダーコリーはすっかり毛並みが汚れ、痩せてやつれが目立つようになった。

公園の中に野良犬が食べ物を確保できるところはない。かつては大きな金属製のゴミ箱があり、食べ残しの弁当や駄菓子類が捨てられていたが、カラスなどが汚すということで、ゴミ箱はなくなつてしまつた。野良犬の口にするものがあるとすれば、ゴミ持ち帰りのきまりを無視して捨てられた食べ物を探し出すか、犬好きの人がくれる餌に運よくありつくくらいしかない。ボーダーコリーは明らかに食うや食わずでいることの判るやつれようだった。

わたしの姿を見る度にこちらに凝らす目の色がますます哀しげになり、胸

が痛んだ。

わが家で飼つてやることを考え、賢そうで見栄えも非常にいいことを強調して老妻に相談すると、二人とも自分のからだの面倒をみるのがやつとなのにと一笑に付された。せめて何か食べ物を持つていつてやるかと言うと、これも一時の気まぐれの慈悲心は無責任だと思ひますと止められてしまつた。

最初に見かけた雨の日から十日ほどでボーダーコリーの姿は公園から消えた。

散歩仲間はまだこれを話題にした。

「飢え死にしてしまつたのやろうか」

「誰かが保健所に連絡して捉まへさせたのでは」

「あの犬なら、誰かに拾われた可能性もあるよ。ペットショップで買えばかなりの値段の犬やからね」

「何かの事情ではぐれてしまつた犬を、飼い主が見つけて連れて行ったことも考えられないでもない」

わたしはむろん、この最後の見方が当たつていてほしいと思つてゐる。

社会常識

堂 昌 一



最近は、最寄りのＪＲ駅にエレベーターが設置されました。エレベーターには

“学生のお客さまへ

こちらのエレベーターを必要と
しているお客様がおられます

学生のお客様は階段を

ご利用ください” 駅長

駅長、駅員、乗客たちみんなの希い
であります。下校時にかち合うとエレ
ベーターは、彼等に占領されて、乳母
車、老人等が乗れないことがあります。
私も外出にはステッキが必要になりま
した。車内で座席を譲ってくださいの
は、中年の方が多くて、中学生、高校
生に席を譲られたことはありません。
修身とは古い言葉ですが、道徳の社
会常識を教えないといけないと思
います。

白川静と立命短歌会

(一)

昭和八年、白川静は、立命館大学専門部文学科国漢学科に入学し、更にこの年の九月の学期はじめから立命館中学で教鞭をとることになった。この二年前に小泉芝三を知り、その悠久なる歌の理念と「ポトナム」の指標であった「現実的新抒情主義」を目標にしなから歌を作り始めていたのである。

暁近く霜ふむ道は人行かず靴底の
冷ゆるに足早め来ぬ



「立命短歌」創刊時の「歌会」の歌である。まことにリアルで即物的な現実的認識の歌である。早朝の凍てついた道の霜柱を踏みながら、自分の履いた靴の下の冷えを詠んでいるのである。結句の「足早めきぬ」がなんとも良い。「感情」をあらわに出すことを極端に回避しながら、ひたすら堪え忍んで生きていた頃の歌である。

若き二十六歳の青年・白川静（旧姓、牧野静の名前）にとって、人生は五里霧中のなかにあった。そうした時代の途中で、小泉芝三を通じて「短歌」に出

会った白川静にとって、短歌の形式は、「五七五七七」の黄金律として顕現してきたのである。

短歌は俳句と違って、「七・七」の十四音長い所に特徴がある。しかし、この「七・七」の所に、しっかりと自己の〈思い〉や〈命〉〈願い〉を入れてうたうところに短歌の特徴がある。だが、歌を始めた頃の白川静は、この「感情」を押し殺して、ひたすら歌を作っている。小泉芝三言うところの「現実的新抒情主義」の「現実感象徴」を若き日の白川静は信奉し「良い歌はよい人格

安 森 敏 隆
(同志社女子大学教授・歌人)

から産まれる」と言う「ポトナム」の創刊精神をそのまま闊歩していくのである。

掲出の歌は、白川静の未来を暗示し、これからの道をひとり頑固に、ひたすら歩いていくトバ口の歌でもある。もう足元には、日中戦争をはじめ第二次世界大戦が押し寄せてきていたのである。

(二)

「立命短歌会」は「ポトナム」の小泉芝三を顧問に、昭和十一年（一九三六）一月十九日に発会され、白川静も出席した第一回の歌会が四条上がる「昭和」で開かれた。後、国崎望久太郎、和田周三、上島志朗等も加わり毎月のように歌会を開き活動していたが、第二次世界大戦の激烈を加えた昭和十八年（一九四三）に、活動を停止した。

白川静とほぼ同時期に歌を始めた和田周三は「立命短歌」創設について「立命館大学短歌会が発足したのは昭和十一年（一九三六）である。一月十九日、発会の歌会が、四条寺町上る『昭和』

で開かれた。（中略）出席者は小泉教授のほか、岡本彦一、伊藤美美（以上卒業生）、牧野静（白川静教授）：（以上三年生）」（立命短歌史 第一章 一九三六～一九四三）（第二回短歌会詠草」（立命館大学短歌会 昭和十一年一月十九日）と語っている。そして「立命短歌会」は、白川静、和田周三等の第一期を受け継ぎ、その折々の時代の中で、断絶はあったものの、次のように発展し、今日まで来ている。

第二期の「立命短歌会」は、昭和三十三年（一九五八）暮れから昭和三十三年（一九五八）初頭にかけて、黒住嘉輝、清原日出夫、今井淳次等によって起こされ、月に、二回の歌会を開き、坂田博義、道上隆三、古川章等も加わって行われた。さらにそれは、「京都学生短歌会」に発展し、高安国世・京大教授の指導のもとに京大の楽友会館を中心に、京都の学生を集めて歌会が毎月のように行われ、昭和三十六年まで続けられた。

第三期の「立命短歌会」は、昭和四

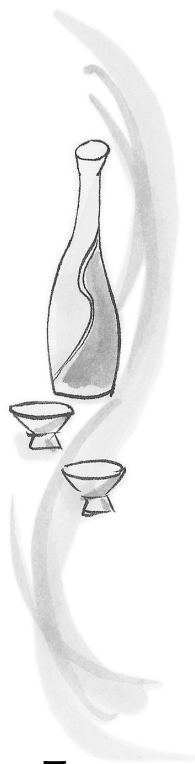
十年四月、国崎望久太郎、和田繁二郎を顧問に、安森敏隆、北尾勲によって「立命館ペンクラブ短歌会」として発足し、その年七月十日に冊子「立命短歌」第一号が発行され、出泳者は十一人であった。その後、田中富夫、清水怜一、田中仁美、阿波喜義等がこれを継承し、会員も三十名前後にまでふくらみ、昭和四十五年（一九七〇）十二月三十日に「十一号」を出し、全共闘運動の中で発展的解消した。

第四期の「立命短歌会」は、平成十六年（二〇〇四）三月に「同立短歌会」として発足して、立命館大学の学生と同志社大学・同志社女子大学の学生を中心に発足して「京都新聞」に、「山城の歌枕」「ケータイ・モバイルつらね歌」などを学生が交互に連載し、友好をふかめ、小泉芝三の理念や白川静の学問を敷衍しながら今日まで来ている。

そして、小泉芝三の創刊した「ポトナム」は、来年（二〇〇九年）の八月号で「一〇〇〇号」を迎える。

ほろ酔い詩歌紀行

やしなひの乳



日 高 昭 二

(神奈川県大学教授)

歌人・吉野秀雄は、酒徒としてもよく知られている。歌はもとより、生活の場面、場面で、酒にまつわるエピソードがくりかえしあらわれてくる。次の歌は、昭和二十年十一月二十二日に秀雄の母が亡くなった際に詠まれた一首である。

通夜の酒母のめぐみといただきて
酔ひつつもと涙しながら

彼の酒すきは、母も認めていたという。「自注」には、身体に悪いと言いがら、父の酒を無断で飲ませてくれた

りしたとある。そういう母を通夜のときに思い出したのであろう、それが冒頭の「通夜の酒母のめぐみといただきて」という言葉になって示されたのである。「もとな」は、わけもなくとか、しきりにとかいう意味で、「涙」が流れるままに母を追想しては飲んでいという、歌人の率直な気持ちを伝えている。

朱漆の杯の蒔絵の三つ巴くるめく
までにわれ酔ひにけり

これは、多摩地方のある酒造家に招

かれて新酒をふるまわれた折りの一首である。「くるめくまでにわれ酔ひにけり」とは、他家での酒席では少々危ない気もするが、相手が酒造家ならば、むしろ「くるめくまで」に陶然と酔うことなくしては、相済みぬということにもなるのだろうか。「われ酔ひにけり」の前に「朱漆」や「蒔絵」に彩られた酒器を披露しているのは、酒造家の豪華なもてなしに対する挨拶であろう。

食^おせといふ松の実を噛め酌めといふ
酒に酔ひけり君がまにまに

これもまた、もてなしを受けたときの歌であるが、秀雄が良寛の弟子をもつて任じていたことはよく知られているところで、この歌なども、良寛の酒の流儀を引き映したところがみえる。秀雄の編になる東洋文庫の一冊『良寛歌集』（平凡社）を次に繙いてみよう。

さすたけの君がすすむるうま酒に
我が酔ひにけりそのうま酒に

わが宿は竹の柱の菰すだれ強ひて
食しませひと杯の酒

「さすたけの」とは、『万葉集』から見える古い語句で、「君」や「大宮人」など、宮廷関係の語に掛かる枕詞であるが、のち、その君を慕わしく思う人に転じ、親愛を込める意味の枕詞になったものである。君がすすめるままに杯をあげて「うま酒」に酔うという、良寛の世界が、そのまま秀雄の歌に反響している。「食しませ」という言葉も、同じく秀雄の歌の「食せといふ」とい

うそれにまっすぐ重なっている。

ついでに、もう少し、良寛の酒の歌を読んでみよう。

明日よりの後のよすがはいざ知らず
今日のひと日は酔ひにけらしも

ひさかたのどけき空に酔ひ伏せば
夢も妙なり花の木の下

酒をこよなく愛した良寛の面目がよく示されている歌である。いや、酒徒の面目といえば、次のような歌をあげねばなるまい。

大御酒を三杯五杯たべ酔ひぬ酔ひて
ののちは待たでつぎける

「たべ」は飲むの謙譲語。初めは遠慮して注いでくれるのを待っていたが、酔ってからは、もう手酌でぐいぐいと飲んでいたよ、というほどの意味である。酒飲みとは、まさにこういうものかと納得させられる向きも多いことだ

あろう。

良寛から秀雄へ、歌と酒の流儀が伝わっていく。しかし、晩年の秀雄は病の床に伏しがちで、それが彼の酒の歌にもさまざまな陰翳をもつてあらわれてくる。

病床を起ちて厨に酒を吸ひやしな
ひの乳とみづからにいふ

病床からひそかに厨に忍び入って酒を探す。「酒を吸ひ」とは、そうした盗み酒の気分をとらえた言葉として、じつにリアルである。しかも、その酒が「やしなひの乳」であるとされているのも、幼いころ母の乳房から吸ったであろう母乳とも重なって、何やらゆかしい。もっとも酒が「やしなひの乳」だとは、酒飲みの詭弁にはちがいがなく、止められている飲酒が家人に見つけられたときの言い訳を用意しているともみられるわけだから、これまた可笑しい。可笑しいが、しかし、やつぱり悲しい。

柔道とアントン・ヘーシンク 伊勢田 邦 貴



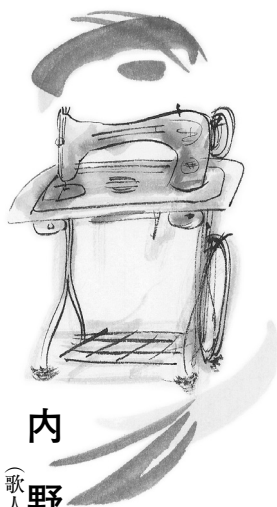
北京オリンピック、柔道表彰式に、あの巨体のヘーシンクの姿を見て懐かしかったね。

当時、大きい大きいヘーシンクの出現に驚いたものの、最初は銅メダルで、そんなものだろうと一息ついたが、負けるはずのない神永選手を簡単に押さえ込んで金メダル。日本中が大ショックで日本の柔道もおしまいと一瞬思った。今は二メートル級は珍しくないが当時は大きいだけに憎らしかったのは事実だ。

柔道も日本だけのものではなくなって、世界の柔道になった。その気持ちになるのにそれほど時間はかからなかった。

オランダの英雄のお陰で、それまで考えられなかった女性の柔道、そしてスーパースターのヤワラちゃんも生まれた。

赤羽のつつみ



内野潤子
(歌人・エッセイスト)

赤羽根のつつみに生ふるつくづく
しのびにけらしも摘む人なしに
赤羽根に摘み残したるつくづくし
再び往かん老い朽ちぬまに
つくづくし摘みて帰りぬ煮てや食
はんひしほと酔^よとにひでてや食はん
つくづくし長き短きそれもかも老
いし老いざる何もかもうまき
つくづくし故郷^{こきやう}の野に摘みし事を
思ひ出でけり異国^{いこく}にして
この正岡子規の歌は、明治三十五年
子規が三十六歳の折の作である。

子規はこの年の九月に彼岸に渡って
いる。最晩年の日には、苦しく寝返り
もできず、畳の上に麻紐で箆^{かん}の鑽^{かん}の
ようなものをつくって、それにすがっ
て寝返りをしていた。

麻痺剤を服用した時のみ少しの平穩
をとりもどし、作歌や文章を綴って
いた。

土筆の歌は、たまたま弟子の河東碧
梧桐一家が、赤羽に土筆を取りにゆく
のに、常日頃子規の看護で家を出られ
なかった妹の律も一所に行くことになっ

た。「妹が一所に行くことになった時には
予まで嬉しい心持がした」と子規
は述べている。そして律が帰ってきて
嬉しそうに土筆取りの話をするのを聞
いて、彼は「予は更に嬉しく感じた」
と言っている。

そのことが初出の作品になったと思
われる。

この歌を読むと、いつも赤羽という
地名に何ともいえない思いが広がって
くる。

昭和十九年七月から二十年の五月ま
で、私は赤羽にあった軍直轄の被服廠
に、勤労働員の学生として通っていた
からである。

周囲二キロと云われる広大な被服廠
は、軍人の身につけるものをすべて造っ
ていた。

靴から軍服から鞆まで、又は防毒マ
スクという物まで造られていたのであ
る。

女学生の私達は、主に軍服の上下を
縫う作業をさせられていた。厚地の軍
服を動力ミシンで二斉に縫う作業場は、

アイロンの匂いに満ちて、ミシンの音もすさまじかった。

四十名足らずの学友の外にも、三校ほどの女子専門学校の生徒が動員されていて、同じ職場で働いていた。

朝毎直属の将校の前で人員報告する私は、胸に「学」の印をつけ腕に水色の腕章をまき、その上鉢巻きをして直立不動であった。

体中がロボットの様に硬直して、何か自分が舞台上で演じているような緊張感で一ぱいだった。

それが十七歳の自分の姿であった。

お昼になって「作業止め」の合図で、動力ミシンの音が止み、大きな暗い食堂で、それでも当時としては鯛や豆入り御飯を食べさせてくれた。それが唯一の楽しみだったかもしれない。

家に帰っても薄いお粥のようなものしかなく、夜毎に空襲のサイレンにおびやかされていた。仲の良かった友人の母親が、焼夷爆弾の直撃で亡くなったのもこの頃である。

私の家も、兄は戦場に、弟は疎開し

母は幼い妹を連れて疎開し家には父と祖母と妹と四人が残っていた。

しかし被服廠は、一夜五月の空襲にあつて倉庫や建物がほとんど焼けてしまったのである。

する仕事がなくなり、学生は荒川の土手を耕し食べる物を植える事になった。当時動員されていた大学の学生と早稲田の高等学院の学生も、一緒に農耕作業することになった。

五月の荒川の土手は、春の草の花が咲き、戦争を忘れさせるような穏やかな光に溢れていた。一緒に働いていた大学生の一人が、私が短歌が好きと言うと「子規がいいよ」と話すようになった。

私は父の本棚にあったアルス社の「正岡子規歌集」を持っていつて彼に見せた。

赤羽根のつゝみに生ふるつくづくしのびにけらしも摘む人なしにと並んで坐りながら、彼は声に出して読んでから「いいな」と呟いた。又「しひて筆を執りて」の一連を読み上

げながら頷いていた。

佐保神の別れかなしも来ん春にふたたび逢はんわねならなくに夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちかてぬ我いのちかも

彼も戦場にいく日が迫っていたのである。

その年の八月十五日、日本は敗れた。

そして私はその学生の妻になり、昭和二十四年十二月女の子に恵まれた。

ある日、私と夫はその昔の赤羽のつみに行つてみようと思ひ立ったのだった。

二人で幼い娘を交代で抱きながら、あの日の土手をどこまでも歩いていった。しかしあんなに近かったのに、それはずい分と遠い場所だったのである。

「疲れたから帰りたい」と私は言つて、二人で赤羽の駅にひき返した。駅の前はけばけばしい映画の看板が立ち並び、街は只ざわざわと騒がしいばかりだった。赤羽の私の思い出は、そこで終る。今も赤羽の子規の歌を見ると、何故か胸の奥が痛むのである。

「ごうきんがけ」とポエジー



宮地 智子
(詩人)

昭和二十九年、四十才で処女詩集『雪花石骨^{フユハシボネ}』を出版した高田敏子は後に新聞の家庭欄に詩を連載し、それをきっかけとし、だれでも入れる詩誌『野火』を創刊した。

私はその活動のあり様に詳しくはないが、短歌や俳句に比べれば歴史の浅い現代詩というジャンルの、その裾野を広げたという功績は大きいのではないかと想像されるのである。その『野火』は、主催である敏子の死によって数年前に廃刊になったことを風の便りで聞いた時、ひとつの時代が終わった

という淋しさを感じたのも事実であるが、同時に、高田敏子という女流詩人の正当な評価の始まりでもあるというのこともまた事実である。

一九八九年に出版された『高田敏子全詩集』を最近になって読んだ。平明な言葉による日常の生活を題材にした詩の、その行間に溢れる豊かなポエジーに私は魅了された。そしてその底に流れる深い絶望と哀しみはこの世に生きることの欲びにまで昇華され、そこには青春のうたとは別の、成熟した女性の知性と感性が織りなす深い洞察に裏

打ちされた静かで艶やかな声が聞こえるのである。敏子五十三才発行之詩集『藤』所収の「別の名」は何と驚くべき愛の形であろうか。(ひとは 私を抱きながら／呼んだ／私の名ではない別の 知らない人の名を)という第一連の、背すじの寒くなるような、けれど現実にはよくあるだろう男と女の色恋沙汰の場面は、これまでの詩歌の中では決して扱われることのなかった題材ではないだろうか。もし、この(私)が若い女であれば、男を決して許さないであろう。ところが(私)は知らない

い人の名に答えながら、まだ生まれな
いまえの《私》を思うのである。そし
てまた《私》自身の遠い過去のかなし
いくちづけや生まれたばかりの《私》
を洗ってくれた父の手を思うのである。
見方を変えれば不毛の愛とでも言い得
るこのような凄まじいまでの恋は、も
う既にこの世の關係性をはるかに超え
ている。《私たちは めぐり合わないま
えから／会っていたのである／別の
なにかの姿をかりて——／私たちは
愛しあうまえから／愛しあっていたの
だろう／別の誰かの姿に託して——》
という諦観よりなお豊穡な領域に到達
しているのである。最終連は、この一
見不幸な男と女の愛の形を、時空を超
えた窮極の愛にまで高めている。《ひと
は 呼んでいる／会わないいまえの私も
抱きよせるようにして／私は答えて
いる／会わないいまえの遠い時間の中を
めぐりながら》この詩集の巻頭に置か
れた作品「藤の花」で《…私の恋もま
た 深く ゆたかに／静かに 美しい
ものになっていった／藤の古木が 千

条の花房を咲かせるように。》と高らか
に謳い上げている、その恋の実相とは、
作品「別の名」に見られるような、あ
る高みに到達するまでの、その底深く
に秘められた苦悩、絶望、憎しみを伴
うものであるということが行間から読
み取ることができるのである。また、そ
れゆえに一層、花房は美しいのである。

一方で、『藤』の前年に出された詩集
『にちよう日』には「母と子の語らい」
などの、日々の暮らしの中の愛が唄わ
れている。そういった平凡と見える小
さな幸福の輝きには例えて言えば、小
さな花々を咲かせるためのしつかりと
した根が不可欠であるように、この世
の暮らしを支える働きもまた不可欠で
ある。「ぞうきんがけ」という作品は、
主婦でもあり詩人でもある敏子の、あ
る日の姿がまるで絵のように髣髴とし
てくるのである。《床をふきながら／柱
に頭をぶつけることがある／ガラス戸
を磨きながら／小さなトゲをさすこと
がある／ああ痛い と ひとり言をいっ
て／涙を流す…》という出だしで始ま

るこの詩は、痛みが去つても涙が次ぎ
から次ぎへと流れてきて、それまでこ
らえた涙が堰を切ったようにあふれて
来るといふふうに展開して、次のよう
な終章を迎える。《ふく》という動作
の／たつたひとりの時間のなかで／私
の心もまた／涙に洗われていることが
ある。読者は当然、その涙のよつて来
たるところを想像力の翼によつて如何
ようにも眺めることができるのである。

《人間は夢と同じ材料で作られていて
その小さな生は眠りに囲まれている》
という西欧の詩人の言葉がある。主婦
もまた、そのような存在なのであり、
夢と同じ材料であるからこそ、涙があ
ふれるのである。子供を育て上げ、家
庭の幸福を築き上げた、堂々たるひと
りの主婦の内に秘めたるドラマは青春
のそのような破綻があつてはならな
いのである。それは藤の古木に咲いた
艶にして妖なる花房のように、ひとりの
主婦の心の中に静かに咲いているの
である。ポエジーの漂うゆえんである。
ポエジーとは、愛の別の名である。